特集・子どもの文学この一年

★総論

読者の翼を広げるために

横川　寿美子

振り返れば、二〇二一年はまさに新型コロナウィルスのパンデミックに明け暮れた一年だった。世界中の人が同じ困難に直面したが、その反応は必ずしも同じではなく、それぞれの国や地域に暮らす人々の価値観やその社会の抱える問題が、この厄災によって顕在化することにもなった。

海外では、マスクの着用やワクチン接種の是非をめぐり、政府の方針に反対する人々が抗議運動を繰り返した。かたや日本ではさほどの混乱もなく、自粛要請と協力要請だけで感染防止対策は着々と実行された。良くも悪くも、日本社会の同調圧力の強さが大きく働いた結果といえる。

しかし、しわ寄せは常に弱い立場の人たちに集中する。コロナのせいで会社が営業不振になれば非正規の女性が真っ先に解雇される。オンライン授業で家にいるようになった子どもの世話は、もっぱら母親の責任となる。

そういう女性の窮状がテレビや新聞でしきりと取り上げられ始めた頃、『女の子はどう生きるか―教えて、上野先生！』（上野千鶴子　岩波ジュニア新書）が刊行された。女子中高生が抱くジェンダー関連の疑問にQ&A方式で上野が答える、というものだが、その問答の多くは、二〇年前、三〇年前からずっと言われ続けてきたことでもある。社会学者の上野から見て、女の子を取り巻く状況は変わっていない、ということなのか――と、愕然としつつも頷きながら読んでいると、例の森喜朗氏の「わきまえている女性」発言が出て、変わらないこの国の根っこを見た思いがした。

それが一月、二月のことだったので、二〇二一年は読書